

放射光実験施設（PF）が正式な組織として再出発してから5年、新生放射光実験施設の2代目実験施設長に就任いたしました。施設長として「放射光科学の発展とPFの次期計画の実現」に向けて全力を尽くしたいと思いますので、どうぞよろしくお願ひいたします。私は博士課程を修了してからすぐにPFに採用され、最初は構造生物ビームラインで研究と装置開発をやっていましたが、いつの間にかビームライン開発にメインで携わるようになりました、他のビームライン建設にも参加するようになりました。10年ほど前からは先端基盤安全グループのグループリーダーを任せられ、PFの再出発からは、基盤技術部門の部門長としてPF全体の基盤技術開発を担当していました。このように現場叩き上げの人間ですので、現場をよく知っているという強みがあると思っています。反面、施設運営に関しては初め手探りになると思いますが、関係各所とよく相談しながら、現状の境界条件の中で学術基盤施設としてのPFの存在感を高め、放射光科学やPFの明るい未来に繋がるよう責任感を持ってあたりたいと思います。

PFの施設運営にあたっては、これまで小杉前物構研所長、船守前実験施設長（現物構研所長）が進めてきた、組織基盤を強固にするための体制強化、学術基盤施設の役割の明確化および次期計画検討基盤の確立などの取り組みを活かし、基本的な方針は継続しつつ、施設や機構内外の連携をさらに強化し、目的を達成するために施設としてプレ前に取り組みを進めていきたいと考えています。また、今回は船守前施設長が物構研で初めて所内から所長に選出され、このような継続的な取り組みを進め易い状況にあると思いますので、物構研からの協力も得て、施設内の運営や、機構内外との連携の強化を図りたいと考えています。私も施設長として、現場をよく知っているという強みを活かし、放射光実験施設、放射光科学第一・第二研究系、加速器第六研究系の一体となった活動、加速器研究施設、共通基盤研究施設、管理局（機構事務本部）及び素粒子原子核研究所との機構内連携、および放射光コミュニティとの連携を強化することを重視して活動したいと考えています。また、KEKの機構長や理事も今年度刷新されましたので、新しい機構執行部との連携関係の構築は喫緊の課題だと思っています。こちらも関係各所と相談しながら、早期に連携関係が構築できるよう対応を進めます。

施設運営においては、運転時間の確保は重要な課題です。PFプロジェクトは基幹経費化されたものの、このところの電気代の高騰や施設工事の関係で、運転スケジュールの決定の遅れや最低運転時間が確保できないなど、ユーザーの皆さんには大変ご迷惑をおかけしました。しかし2024年度に関しては、機構からの支援を受け、少なくとも年間の運転時間（PF3600時間、PF-AR2400時間）を確保できることになり、大きな施設工事も少ないので、久しぶりに

スケジュール通りの運転ができそうなのは良いニュースです。今後も運転スケジュールの定常化に向けて努力したいと思います。一方、老朽化対策や基盤整備、放射光科学やPFの将来のための開発への投資も重要です。運転と整備をバランスよく実施しつつ、将来に向けたR&Dを並行して進めるのは大変難しいことですが、機構や物構研からの協力や外部資金の獲得による予算確保に加えて、必要な装置や設備などについて将来的な転用を考慮に入れる設計をするなど工夫して、開発や整備も着実に進められるようにしたいと考えています。

次期計画に関しても、これまで関係各所やユーザーの皆さまと進めてきた、新放射光源施設の構想を着実に煮詰めて具体的な建設提案を完成させるとともに、大学共同利用の使命や幅広いシーズ探索研究の重要性、それらを進める上でテーマとして掲げている「サイエンスの深化・融合・創成」の説明を強化し、機構内外での理解が広がるように活動したいと考えています。これまで機構内ではフォントンファクトリー計画推進委員会を設置、検討を重ね、ユーザーの皆さまとも2回にわたるPF研究会でサイエンスケースの検討を進めてきました。KEK-PIP2022でもKEKとして別枠で進めるべき課題であると位置付けられ、それをベースとして、一昨年に日本学術会議が募集した「学術の中長期研究戦略」に、マルチビームをキーワードとし、新放射光源施設を含めた統合型量子ビーム科学の施設計画がKEK機構長から提案されたこと、昨年の文科省「学術研究の大型プロジェクトの推進に関する基本構想（ロードマップ2023）」にもKEK機構長から「研究分野を深化・融合・創成する放射光マルチビーム実験施設」が提案されたことは、新放射光源施設の実現に向けて非常に大きな一歩になりました。並行して概念設計をまとめたデザインレポートの第一弾（PF-HLS CDR ver.1）をまとめて公開しました（<https://www2.kek.jp/imss/pf/pf-hls/library/>）。今後、毎年度2回更新を目標に検討内容の充実化を図り、最終的な設計提案書を完成させたいと考えています。今年度後半には新放射光源施設に関するPF研究会の開催を予定しており、ユーザーと放射光コミュニティとのさらなるサイエンス検討や新施設に関する情報共有を図り、この概念設計に反映させたいと考えていますので、ユーザーの皆様方の積極的なご参加をどうぞよろしくお願ひいたします。また、設計や計画の充実化を図ることはもちろんですが、国内の他の放射光施設の整備計画やKEKの他の分野の大型計画との調整も非常に重要です。PFは、大学共同利用機関である物構研の中核施設として科学研究と人材育成の拠点となること、また、世界有数の加速器の専門家組織を有するKEKに所属する強みを活かした開発研究の拠点となることが期待されていると思います。日本学術会議「第24期学術の大型研究計画に関するマスタープラン（マスタープラン2020）」で日本放射光学会から提案して重点大型研究

計画に選定された「放射光学術基盤ネットワーク」でも学術施設の役割の重要性と施設高度化の必要性が述べられていましたが、学術施設の計画を具体化していく上では、学術研究や大学共同利用の説明強化、学術施設間の役割分担の明確化が必須であると考えています。そのためにはまず、PFならではの取り組みやPFの強みを活かした役割をしっかりと説明することが重要だと思います。今後、施設内外の関係者と強く連携して、学術施設やPFの果たすべき役割を明確化し、学術施設だけでなく放射光コミュニティ全体で議論して広く理解を求めていきたいと考えています。非常に難しい課題だとは思いますが、ユーザーの皆さんと一体となり、この課題に当たりたいと思います。皆さまのご理解とご協力、そして応援を何卒よろしくお願ひ申し上げます。

先日、4年ぶりにPFで花見を開催しました。晴天のもと満開の桜を見ながらスタッフの皆さんと話をして、普段聞けないようなことを話せて非常に有意義でした。コロナ禍が始まってリモート会議が当たり前になり、ある部分は効率化が図れたと思いますが、一方通行的な報告となりがちで、意見交換をしたくともなかなか議論にならないことが多かったと感じています。最近少しづつ対面での会議も増えてきて、そうなると同時多発的に議論が発生し、大小さまざま議論が実質的に進むことが多く、やはり意見を戦わせて物事を進めるためには対面での会議が必要だと実感しました。本稿でも連携、連携と書きましたが、強く連携するためには顔を突き合わせての議論が大事だと思います。特に難しい案件の議論では尚更だと思います。今後ユーザーの皆さんとも対面の会議の機会をなるべく設け、言いづらいようなことでも腹を割って話せるようにすることで、よりよい施設運営や高度化、次期計画に反映できるようにしたいと思っていますので、皆さま、「放射光実験施設との連携」をどうぞよろしくお願ひいたします。

この4月から高橋前会長の後を引き継がせていただきました慶應義塾大学の近藤と申します。至らない者ですが、どうぞ宜しくお願ひ申し上げます。

ご挨拶の機会をいただきましたので、初めに、簡単に自己紹介をさせていただきます。私の専門は表面科学、触媒科学で、主に軟X線を使ったオペランド計測をBL-13でさせていただいております。PF実験ホールに入ってすぐのところのビームラインで実験させていただいているので、お見掛けくださった方もいらっしゃるのではないかと思います。PFとの関わりは学部の卒業研究以来になりますので、もう35年以上になります。卒業研究以来、ずっとPFに育んでいただいて、その結果として、今日の自分があると思っています。その意味で、どのような形であれ、PFのためにできることがあればやらせていただきたいと思っているところでございまして、そのことが、今回、微力ではありますがPF-UAの会長をお引き受けさせていただいた理由の一つになります。

さて、PF-UAは、ご承知のように、放射光実験施設Photon FactoryのUser Associationで、その活動の目的は、基本的にはユーザーがより良い経験を得られるよう支援して、関連するPhoton Scienceや放射光技術の発展に貢献することにあると思います。特に、Photon Factoryにあっては、放射光実験施設ですから、より良い放射光実験ができるよう支援するのが第1目標だと思います。そしてもう一つ大事なのは、PFは大学共同利用機関が運営する施設ですので、そこは本来、学びの場でもあることです。PF-UAは、ユーザーがより良い学びができるよう支援するのがもう一つの目標かと思います。また、PFあってのUAですから、放射光施設としてのPFの発展をユーザー側からできる限りのサポートをすることもUAの大事なミッションだと思います。

これらのこと頭に置きながら、次の3年間でどのようなことを大事にしながらUAの活動を進めるかについて述べさせていただきます。一つ目は、高橋前会長が施設や幹事の皆様方と一緒に進めてこられた新しい活動をしっかりと継承していくことです。マルチビーム利用を想定したPF研究会や、PF-UA学生論文賞、PF-UAサマースクールなどこの3年で始めたPF-UAの活動をきちんと継続していくと思います。二つ目はユーザーが施設を利用する環境をよりよくし、施設を利用するメリットを高めることです。これまで、施設のご尽力で利用環境は格段によくなりまして大変感謝しているところでございますが、さらにユーザー間の相互交流を通してユーザーがPFにコミットす



る価値を高められればと思っています。その鍵の一つはユーザーグループの活動にあると思っております。コロナのためにユーザーグループの活動がだいぶ抑制的にならざる得ない時期を過ごして参りましたが、その時期を終えて、これからユーザーグループの新たな活動を後押ししていきたいと思います。三つ目はPFの大学へのアピールです。施設自身も努力をされていますが、その施設を使わせていただいている私たちユーザーがハッピーであることが大学に伝わることが、新たなユーザーを増やし、様々なコラボレーションの機会を増やし、ユーザーCommunityを活性化するにつながると考えています。のためにPF-UAがもつ器、例えばホームページやUAが主催する様々な行事を通して、大学へのアピールに用いることができると考えています。それによって、大学Communityとのより強い繋がりを築いていくことを目指せればと思っています。

以上、簡単ですがこれからの3年間に大事に進めたいことを書かせていただきましたが、どれもこれも、ユーザーと施設の皆様のご協力が不可欠です。私たちユーザーはPhoton Factoryという船に乗った乗組員と見ることができます。お客様として乗っているのではなくて、施設の皆様と協力していろいろ努力することで、乗り心地を格段に良くしたり、船がより速くより遠くまで航海することを可能にすることができるかもしれません。そのような方向を目指して、ご一緒にこれから3年間を歩んで参りたいと思います。皆様のご協力を心からお願いする次第です。何卒、宜しくお願い申し上げます。

物質構造科学研究所（物構研）の所長に2024年4月1日付で着任しました。Diversity Frontierを掲げ、人の協力と組織の連携によって研究の融合を図り（新領域開拓＝フロンティア創成），物構研を世界中から研究者が来訪する活気溢れる研究拠点とすることを目指します。

ご存知の皆さまも多いかと思いますが、PFが物構研の組織として再誕生（再組織化）した2019年度からの5年間、PFの施設長を務めさせていただきました。今年度から、PFも新体制になり、PF-PACの委員やPF-UAの会長と幹事、運営委員も交代しています。PFへの関わり方は人それぞれですが、私自身は物構研の所長として、PFに関わる全ての皆さまのご協力に感謝するとともに、より魅力的でより多くの人に愛されるPFとなるように全力を尽くして参る所存です。一層のご協力をよろしくお願ひいたします。

物構研は、大学共同利用機関であり、個々の大学では整備・運営することの困難な最先端の大型装置を提供する「全ての大学の共同利用の研究所」です（文部科学省Web参照）。KEKつくばキャンパスでは放射光(PF)と陽電子(SPF)のビームを、東海キャンパスでは中性子(KENS@MLF)とミュオン(MSL@MLF)のビームを利用するビームライン群を整備して、また、つくばキャンパスにはクライオ電子顕微鏡も導入して、物質・生命科学を中心とした学術研究を推進しています。大学共同利用機関として、大学の研究者と共に学術研究のフロンティアを開拓・推進する物構研の各施設には、研究者が主体的に研究教育を実施できる自由度や研究者のニーズへの対応に加えてシーズを育生する多機能性が求められると考えています。

物構研の理念の中に「量子ビームの先端的・複合的利用の追求」という文言があります（物構研Web参照）。先端的利用の追求において、量子ビームの高性能化（加速器科学の観点）、ビームライン装置の整備（量子ビーム科学の観点）、利用環境・周辺機器の整備（物質・生命科学の観点）が必要であることは説明待ちません。これまで各施設において具体的な取り組みが実施されてきました。また、複数の施設を有する物構研では、複合的利用の追求が特に重要であり、各施設の取り組みを超えて量子ビーム連携（マルチプローブ研究）が推進されてきました。後述のように、これからは量子ビーム協働（マルチビーム研究）を推進したいと考えています。

KEKの提案する放射光マルチビーム実験施設PF-HLSは、大学共同利用機関の施設に求められる自由度や多機能性を有し、先端的利用と複合的利用の追求の観点に優れるDiversity Frontierを具体化した計画であり、その実現に向けては、予算の検討と特長の強化により、計画をブラッシュアップすることが重要です。予算の検討については、物構研やPFに留まらない議論が必要であるため、ここでは特長の強化に限定して2つの提案をしたいと思います。1

つはリーディング研究分野の設定、もう1つは陽電子や中性子などとの組み合わせによる異種マルチビーム研究の具体化です。

PFの使命として「①開発研究を通じて世界を先導する新技術と若手人材を供給する。②先端基盤施設として物質と生命に関わる多様な利用研究を推進する。」が謳われています。新領域開拓をPFの使命のトップに明示し、PF-HLSにおけるリーディング研究分野（複数かつ可変）を設定することで、どのような新しいサイエンスが拓かれるのかを明確にすることを提案します。建設中の開発研究多機能ビームラインでは、軟X線と硬X線のマルチビームによる実証研究が予定されています。学術施設連携として、UVSORとHiSORに加えて、世界初の放射光専用蓄積リングSOR-RINGを1976年から1997年まで共同利用に供した実績のあるISSP-SORにも今年度から参画をいただいている。本ビームラインにおける放射光マルチビームの利用により、リーディング研究分野の先駆的成果が創出されることを期待しています。

PF-HLSに物構研らしさやKEKらしさを組み込むことも重要です。具体的には、電子・陽子加速器によるコンパクトな線源設計の可能な陽電子や中性子との異種マルチビーム研究を推進することを提案します。また、物構研に施設はありませんが、レーザーについても協働の可能性を探りたいと考えています。一方で、ミュオンについてはコンパクトな線源設計が可能になるまで待つ必要があると認識しています。時として、0と1（有無）、1と2（単複）には、決定的な違いがあります。順次利用のマルチプローブ連携から同時利用のマルチビーム協働へと進化させることで、量子ビームにおけるシングルとマルチを決定的な違いにできるものと期待しています。

この秋には、放射光学術4施設（UVSOR, HiSOR, ISSP-SOR, PF）とPF-UAの主催でPF研究会「放射光2ビーム利用と広波長域実験が切り拓く学術フロンティア」が開催されます。物構研としても、異種マルチビーム研究やKEKの他の研究所・施設との連携研究を主題としたIMSS新領域開拓研究会（仮称）を企画するなどして、PF-HLS計画を盛り上げていきたいと考えています。皆さまのご協力とご支援をよろしくお願ひいたします。

放射光実験施設（PF）の施設長に就任して半年が過ぎましたが、この半年は施設長だけでなく基盤技術部門長と測定装置部門長も兼任しており、現場の細かい所から施設運営まで担当していたため、十分に対応することができなかったと思っています。特に施設運営に関しては初めてのことばかりで手探りの状態でしたので、色々な方に相談させていただいたり助けていただいたりしながら、なんとかこなしていた状況でした。この状況も、10月1日付で基盤技術部門長に小澤健一教授、測定装置部門長に中尾裕則教授、またPF-PAC第5分科所内担当に松垣直宏教授が就任したことでほぼ解消されたと思います。今後は彼らと役割分担しながら、施設運営や次期計画に関する様々な課題に取り組んでいきたいと思います。引き続き皆様のご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

大学共同利用機関にあるPFの使命と役割は、広波長域光源を持つ学術大型施設として、大学の研究者とともに学術研究のフロンティアを開拓・推進することであり、ビームライン設備、ビームタイム運用、施設運営、人材育成、技術開発等、様々な面で多様性・自由度が重要であると考え、“Diversity Frontier”を掲げて既存施設の運営や次期計画の検討を進めています。PFは長年にわたり大学共同利用を推進してきており、開発研究や探索研究に有利な長期間の実験課題や、大学と協力してビームラインや装置の開発を進めてきた実績等、人材育成に適した環境を有しています。喫緊の社会課題として大学の研究力強化が謳われていますが、PFでは学術研究基盤及び新たな知を創成する場を提供し、大学と共同で人材育成、技術開発、新領域開拓を進めることで役割を果たそうとしており、そのためにも早期に次期計画を実現したいと考えています。

PFの強みとしては、加速器の専門研究機関であるKEKの施設であること、また物質構造科学研究所の量子ビーム施設の一つであることが挙げられます。次期計画でも、KEKで開発が進められている超伝導加速技術を活用し、PF Hybrid Light Source (PF-HLS) 計画で検討してきたライナックに加え、蓄積リングへの導入の検討も始めました。また、放射光だけでなく低速陽電子や中性子など他の量子ビームを同時利用するなど、物構研ならではの提案として、異種マルチビーム研究を推進する施設として検討を進めています。

使命に基づく国内外の連携も極めて重要です。同じ学術施設であるUVSORとHiSORとは、日本学術会議マスターープラン2020で採択された放射光学基盤ネットワークの事業として、様々な取り組みを連携して行ってきましたが、今はさらに一步踏み込んで、学術施設の役割や将来計画などの議論も顔を突き合わせて進めています。2024年度からは、ISSP-SOR（東大物性研軌道放射物性研究施設）を加えた学術4施設でともに議論を行い、学術研究や大学

共同利用の説明強化、学術施設間の役割分担の明確化などを進めています。もちろん、学術施設内だけでは不十分ですので、今後は放射光コミュニティ全体で議論して広く理解を求めていきたいと考えています。特に、現在日本放射光学会が主導し、施設関係者や専門家を集めて国内の放射光施設のポートフォリオを議論する場が設けられており、2025年1月の放射光学会年会でも、これに関する特別企画講演も予定されています。これまでオープンな場ではなかなか議論されることが無かったので、貴重な機会だと思います。

放射光学基盤ネットワークとPF-UAの共同提案で、PF-HLSのサイエンスケースを主題として、2024年11月17-18日にPF研究会「放射光2ビーム利用と広波長域実験が切り拓く学術フロンティア」が開催されました。これは、2022年度に2回にわたって行われたPF研究会「開発研究多機能ビームラインの建設と利用」を受けたもので、前回の研究会で検討された放射光2ビーム利用サイエンスのさらなる深掘りと、新たな広波長域利用サイエンス展開の提案、及び2つの特徴的なビームラインBL-11A, -11B(2ビーム利用)、BL-12A(広波長域利用)で実施する開発研究や実証実験に関する議論を行いました。放射光以外の量子ビーム関係者も含め、多様な分野・手法を専門とする200名以上が参加して活発な議論が繰り広げられました。前回は開催できなかった懇親会も設定され、貴重な異分野融合の場として夜遅くまで盛り上りました。2日目最後のパネルディスカッションでは、複数のパネラーから、PF-HLSが目指す異種マルチビームによる新分野・新手法の創生のためには、このような研究者同士のコミュニケーションを繰り返し行うことが最も重要であると提言がありました。今回のPF研究会での活発な議論を見ていてまさにその通りだと感じました。PF-UAからも今後の研究会の提案がありましたが、この盛り上がりを次に繋げることが大事だと思います。研究者同士のコミュニケーションが取れる場を継続的に設けて、異種マルチビームの先端利用から量子ビーム科学の新時代を切り拓きたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

新しい体制となって迎えた2024年度も残りわずかとなりました。各年度最後のPFニュースでは、物構研副所長(つくばキャンパス担当)より「物構研つくばキャンパスだより」をお送りしています。

まずは近況ですが、1月10日から12日にかけて、つくば国際会議場において日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウム (JSR2025) が開催されました。7年ぶりのつくばでの開催ですので、五十嵐教之実行委員長、小澤健一実行副委員長を中心に、多くのPFスタッフが運営にあたりました。事前登録者数は600人以上、総発表件数は400件以上と、いずれも新型コロナウイルス感染症の流行以前と同程度かそれ以上の規模となるとともに、5年ぶりに懇親会も開催され、新年恒例の景色が戻ってきたことを改めて実感しました。また、日本放射光学会総会において学会の各賞が発表され、小杉前所長(現在の所属は大阪大学)が第8回放射光科学賞を受賞されるという嬉しい出来事もありました。特別企画講演では日本の放射光施設のポートフォリオと将来展望が議論され、改めて、PFの特長をどのようにアピールして将来につなげていくかを考える機会になったと思います。今年度はまた、3月12日から14日にかけて、やはりつくば国際会議場で量子ビームサイエンスフェスタが開催されます。こちらもつくばでの全面的な対面開催は6年ぶりとなりますので、ぜひご参加ください。

さてここからは、タイトルとは若干ずれる気もしますが、物構研の東海キャンパスに絡めたお話をしたいと思います。

ご承知の通り、東海キャンパスにはKEKと日本原子力研究開発機構が共同で運営するJ-PARCがあり、その中の物質・生命科学実験施設(MLF)では、中性子とミュオンを利用した研究が展開されています。物構研は、中性子ビームラインのうち8本と、すべてのミュオンビームライン(ミュオン源を含む)を運営しており、それぞれ、中性子科学研究系、ミュオン科学研究系が担当しています。もともとはつくばにあった中性子とミュオンの実験施設がJ-PARCに移って以来、物構研はつくばキャンパスと東海キャンパスに分かれて活動をしていることになります。

2つのキャンパス間の地理的な距離のハンデを克服すべく、物構研では様々な工夫がされてきました。小杉信博前所長が着任した2018年には「教授会議」が設置され、当初はキャンパスごとに開催されていましたが、2020年の新型コロナウイルス感染症の流行に伴う完全リモート化を経て、2023年度後半からは両キャンパス合同で行うことになりました。なお、教授会議の正規メンバーは准教授以上ですが、前半の報告の際にはすべてのスタッフが参加できることにしているため、互いのキャンパスの様子を垣間見ることができます。船守現所長が就任

した2024年度からは、全スタッフが参加できる部分の名称を「全体会議」と改め、基本的にはつくばと東海を交互に主会場として、対面とリモートのハイブリッド形式で開催しています。

また、今年度から物構研コロキウムでは、主に中性子・ミュオンに関する講師の方にはつくばで講演を、逆につくばキャンパスに関連した活動をされている方には東海で講演をしていただくという方式が始まりました。これまでに前者として、沓名貴彦先生(国立科学博物館)に、「文化財科学からみた文理融合研究における量子ビーム利用への期待 - 非鉄金属生産技術を事例に -」と題して主にミュオンを用いた研究を、また、大竹淑恵先生(理化学研究所)に、「理研小型中性子源システム RANS プロジェクト - 現場で役に立つ中性子線利用 -」と題して小型中性子源に関する内容を、つくばでご講演いただいています。関連して、9/13には理化学研究所のRANS、12/19、12/26には国立科学博物館の筑波研究施設の見学会を開催しました。さらに物構研内でも、「着任セミナー」として、新任や昇任したスタッフに、勤務地とは逆のキャンパスで研究・開発の紹介をしてもらう企画を始めました。これらの取り組みは、異なるプローブでどんなことが行われているかをより深く知る、とても良い機会になっていると思います。

物構研では、2020年に量子ビーム連携研究センター(CIQuS)、2023年に新領域開拓室(S.I.Center)が、それぞれ設立され、量子ビーム連携(マルチプローブ研究)、さらには量子ビーム協働(マルチビーム研究)を推進しています。上記の見学会は、S.I.Centerの取り組みの一環として行ったのですが、3/5には、大強度DCミュオンビーム施設(MuSIC)を有する大阪大学核物理研究センター(RCNP)において、S.I.Center、CIQuSとの合同ミーティングが開催され、つくばキャンパスから多くのスタッフが現地で参加する予定です。

ご承知の通り、PFでは次期計画として「量子マルチビーム施設」を掲げ、放射光、中性子、ミュオン、低速陽電子といった量子ビーム協働による、物構研、そしてKEKならではの新しいサイエンスの開拓を目指しています。1/20に開催されたフォトンファクトリー計画推進委員会では、量子ビーム協働の一つとして、「放射光・低速陽電子マルチビームで挑む次世代表面ナノサイエンス」を紹介しました。今後ますます、東海キャンパスとつくばキャンパスの実質的な距離を縮め、4つの量子ビームにクライオ電顕も加えたプローブを有する物構研の強みを存分に發揮して、新しい時代を切り拓いていきたいと考えています。